

ホツ未明

遠くまで鳴る雷



NoAF:

登場人物

ナレーター

二郎

お母さん

## 一場

◆夏。例年のごとく、きゅうりを育てる二郎。

◆ナレーター、二郎、お母さん

二郎は、前の圃にまいた、いろいろの野菜の種子が、雨の降った後で、かわいらしい芽を黒土の面に出したのを見ました。

小さなちよりの羽のように、二つ、葉をそろえて芽を出しはじめたのは、きゅうりであります。

そのほかにも かぼちや、とうもろこしの芽などが 生えてきました。

きゅうりは、だんだんと細い糸のようになつるを出しました。

お母さんは、きゅうりの植わっているところに、たなを造ってやりました。

たなといっても、垣根のようなものであります。それに、きゅうりのつるはからみついて、のびてゆくのであります。

やがて、ほかのいろいろな野菜の芽も大きくなりましたが、いつしか きゅうりのつるは、その垣根にいっぱいにはいまわって、青々とした、厚みのある、そして、白いとげのようなうぶ毛をもった葉がしげりあったのであります。

そのうちに、黄色の、小さな花が咲きました。その花のしぼんだ後には、青い青い、細長い実が なったのであります。

二郎は、毎年、夏になると、こうして きゅうりのなるのを見るのでありますが、その初なりの時分には、どんなにそれを見るのが楽しかったでしょう。

二郎 「もう、あんなに大きくなった。」

と、彼は、毎日のように、家の前の圃に出ては、きゅうりの葉蔭をのぞいて、一日ましに大きくなってゆく、青い実を見ては、よろこんでいたのであります。

いくつもきゅうりの実はなりましたが、その中に、いちばん先になったのが、いちばん大きくみごとにできました。

二郎 「お母さん、きゅうりがあんなに大きくなりましたよ。」

と、二郎は、外から家の内に入ると、毎日のように母親に告げました。

お母さん 「ほんとうに、いきゅうりがなったね。」

と、お母さんはいわれました。

二郎は、そのきゅうりが よくてよくて、しょうがありません。

毎日それに、さわってみては、もいでもいい時分ではないか  
とおもって思っていました。

## 二場

◆ある日。お母さんが二郎に、きゅつりを水神さまに捧げるように言う。  
◆ナレーター、二郎、お母さん

ある日のことでありました。お母さんは、二郎に向かって、

お母さん 「二郎や、あの大きくなったきゅつりをもいでおいでなさい。

つるをいためないように、ここにはきみがあるから、上手にもいでおいで。」  
といわれました。

二郎は、さっそく圃へと勇んでゆきました。そして、はきみを握って、  
葉蔭をのぞきますと、そこに大きなきゅつりが ぶらさがっています。

二郎は、なんとなく それをもぐのが しびないような、哀れなような、  
惜しいような気がして しばらくそこに立っていました。

二郎は、ぼんやりとして、夢のように、きゅつりが芽を出したばかりの  
姿や、やつと竹にからみついて、黄色な花を咲かせた時分を思い出すと、  
ほんとうにこの実をつるから切り離すのが かわいそうで  
ならなかったのです。

二郎は、チョコキンときゅつりをもぎました。そして、それを鼻にあてて  
匂いをかいだり、もっと自分の目に近づけて、このいきいきとした、  
とりたての、新しい青い実を ながめたのであります。

二郎 「お母さん、これをどうして食べるの？」  
と、二郎はたずねました。

お母さん 「まあ、みごとな、いい初なりですね。これは食べるのでは  
ありません。おまえが、釣りにいったり、泳ぎにいったりするから、

水神さまにあげるのです。」

と、お母さんはいわれました。

二郎は、それを聞くと、なんだか惜しいような気のうちにも、ひとつのさびしさを感じたのであります。

二郎 「水神さまは、きゅうりをたべなさるの？」

お母さん 「きゅうりは、ぶかぶかと流れて、遠い遠い海の方へいってしまふのですよ。それでもおまえの志だけは、水神さまに通るのです……。」

と、お母さんは哀れっぽい声でいわれました。

二郎は、自分の名をそのきゅうりに書きました。きゅうりの青いつやつやとした肌は、二郎の書こうとする筆の先の墨をはじきました。それでも、二郎は、何度となく筆で、その上をこすって字を書きました。

二郎 「お母さん、よく書けません、これでいいですか。」

と、二郎は、きゅうりを母親に示しました。

お母さん 「おお、いいとも、いいとも。それをおまえは持っていて投げておいで。」

と、お母さんはいわれました。

二郎は、きゅうりを持って、いつも自分たちのよく遊びにゆく河の橋のところへやってきました。ちょうど雨上がりで、水がなみなみと岸にまであふれそうに、たくさんでありました。そして悠々と流れていました。

両岸には草や雑木がしげっていました。

二郎は、ドンブリと橋の上から、手に持っていたきゅうりを水の上に落としました。きゅうりは、浮きつ、沈みつ、二郎が欄干につかまって見ている間に、下の方へと流れていってしまいました。

二郎は、この日、家に帰っても、きゅうりのことを思い出して、さびしそうにしていました。

二郎 「いまごろは、どこへいったらう？」

二郎は、あてなく、きゅうりの行方を思っていたのです。すると晩方の空が晴れて、かなたには夏の赤銅色の雲がもくもくと、頭をそろえていました。そして、遠くの方で、雷の音がしたのであります。

## 二場

◆夜。二郎が眠りに就く。きゅうりが川を流れていく。

◆ナレーター

二郎は、寝るときもきゅうりのことを思っていました。

しかし、床に入ると、じきに寝入ってしまいました。

その間、きゅうりは、水に、流れ、流れて、夜の間に、森のかげや、

広い野原や、またいくつかの村を通り過ぎて、夜の明けたころには

もはや幾里となく遠くへいってしまっただけです。そして、まだ、

そのうえにも、きゅうりは、旅をつづけていました。

その日の午後でありました。一人のみすぼらしいふうをした乞食の子が、

低い橋の上に立って、独りきびしそうに、流れてゆく水の上を

見ていました。水には、雲の影と草の葉の影が映っていたばかりです。

そのとき、一つのきゅうりが、ぶか、ぶかと流れてきました。

子供は、棒を持ってきて、あわててそのきゅうりを拾い上げました。

きゅうりに書かれた文字は、すっかり水に洗われて消えていました。

けれど、遠い、遠い、水上から流れてきたことだけは、乞食の子にも

わかりました。なぜなら、まだ、このあたりは、風が寒くて、

きゅうりの芽が、そんなに大きくはならないからです。

乞食の子は、そのきゅうりを手にとって、大喜びでした。さっそく、

これから母や妹に見せようと、あちらに駆け出してゆきました。

この日、はじめて、山のあちらに、雷の鳴るのを、子供は

きいたのであります。子供はふと途の上に立ち止まって、



耳<sup>みみ</sup>を傾<sup>かたむ</sup>けていました。北<sup>きた</sup>の方<sup>ほう</sup>にも、夏<sup>なつ</sup>がやってきたのであります。

〈完〉

## 1場

**黒土**<sup>くろつち</sup>：黒い土のことです。養分を多く含むため、作物を育てるのに向いています。

**きゅうり**：春に植えると、夏頃に実がなる、夏野菜として知られています。日本で本格的に栽培されるようになったのは、江戸時代に入ってからのことです。今では、日本の食卓に欠かせない食材になっていますね。お盆の精霊馬として使ったり、カッパの好物とされたり、特別な意味を持つこともあります。

**時分**<sup>じぶん</sup>：おおよその時期や時刻、またはちょうどよい時期のことです。

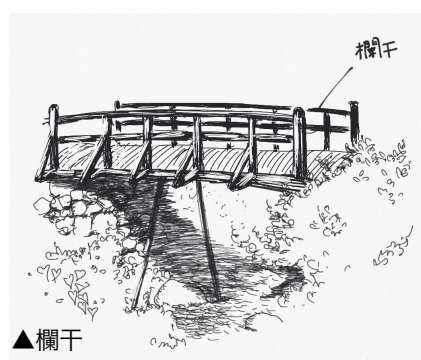
## 2場

**初なり**<sup>はつ</sup>：その年に初めて実った果実や野菜のことです。

**水神さま**<sup>すいじん</sup>：水の神様のことで、田

の神様ともされました。カッパやへび・**籠**<sup>りゆう</sup>を、神そのものや、神の遣いとすることもあるようです。ここでは、水の事故に遭わないようにときゅうりを捧げていることから、川の神様かもしれません。

**欄干**<sup>らんかん</sup>：橋のふちに、落下防止のために設置される手すりのことです。



▲欄干

**悠々と**<sup>ゆうゆう</sup>：ゆったりと落ち着いているようすです。

**暮れ方**<sup>がた</sup>：夕方のことです。

**赤銅色**<sup>しゃくどういろ</sup>：金属の赤銅のような、艶のある暗い赤色です。

## 3場

**床**<sup>とこ</sup>：寝床のこと、つまりお布団のことです。

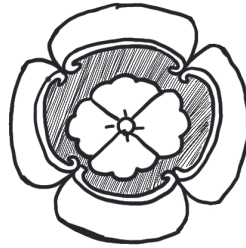
**幾里**<sup>いくり</sup>：「里」は距離の単位で、3～4 km ほどです。「幾」は数がわからないことや、たくさんであることを表します。「幾里」だと、何十 km もの距離になります。

**乞食**<sup>こじき</sup>：元は人々から食べ物の寄付を乞いながら放浪する僧侶を指していましたが、後に物乞いをして生活する人々のことを指すようになりしました。戦後、生活保護等の制度が整うまでは、空襲で焼け出された婦女や傷痍軍人など、物乞いで生活する人が多くいました。現代では、差別語とされるため、使われていません。

**水上**<sup>みなかみ</sup>：川の上流のことです。

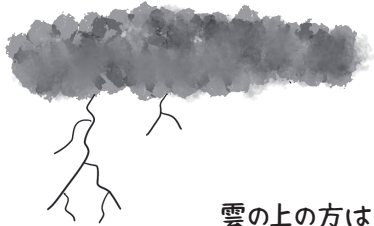
## 木瓜紋ときゅうり

木瓜紋は、八坂神社をはじめとする全国の祇園神社で、神紋(神社の紋章)とされています。きゅうりを輪切りにしたようすと似ていることから、お祭の前後できゅうり断ちをしたり、奉納したきゅうりを食べたりする地域があるそうです。



## 河童ときゅうり

河童は、川に住むいたずら好きの妖怪です。川で泳ぐ子どもの足を引っ張ったり、畑を荒らしたりすると言われていますが……元々、水の神様として祀られる一面もあります! 河童が好きなものと言えば、相撲ときゅうり。相撲は立派な神事ですし、きゅうりは、水神様にお供えするお野菜です。だから、河童はきゅうりが好きなんですね。二郎のお母さんが言う「水神様」は、もしかしたら、河童のことなのかも?



## 遠雷

雲の上の方は気温が低いので水の粒が、下の方は気温が低いので水の粒が行ったり来たりしています。

水の粒が激しくぶつかり合い、プラスとマイナスの電気が発生。プラスの電気は上の方へ、マイナスの電気は下の方へ移動します。この時に起きる摩擦で光と音が出るのが雲の中の雷です。雲の下に来たマイナスの電気が、地上のプラスの電気に向かって飛ぶと、落雷となります。遠雷は、遠くから聞こえてくる雷で、夏の季語です。雷の音は、数km先まで聞こえます。



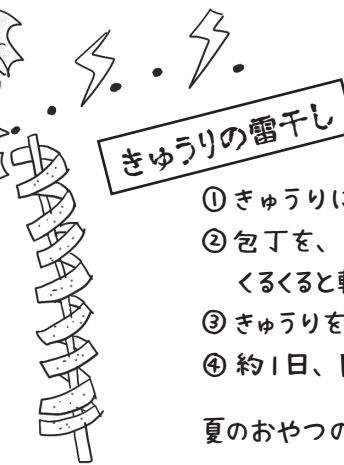
## きゅうりの日

6月14日は、イギリスのきゅうり栽培者が、きゅうりの素晴らしさを知ってもらうため、2011年から「世界きゅうりの日」を始めたとか。世界中からも河童からも愛されるお野菜、きゅうりです!



## きゅうりの成長

きゅうりは、家庭菜園でも比較的簡単に育てられます。プランターでもOK! 支柱にツルを巻き付けて、黄色い花を咲かせますよ。



## きゅうりのミニレシピ

- ① きゅうりに割り箸を刺します。
- ② 包丁を、きゅうりの先っぽから斜めに入れ、くるくると転がしながら切れ目を入れて行きます。
- ③ きゅうりを塩水に10分ほど漬けます。
- ④ 約1日、陰干しします。

夏のおやつ代表、1本漬けに楽しい見目をプラス! お味噌、ゴマ油、辛子などの調味料もオススメ!

Podcast ののラジオ  
好評配信中！



視聴・購読はこちらから  
<https://gekidannono.com/wp/archives/podcast>  
ご意見・ご感想はこちらへ  
[radio@gekidannono.com](mailto:radio@gekidannono.com)

劇団ののと読む名作文学 小川未明

「遠くで鳴る雷」 Podcast 版

発行日 2018年9月10日  
著者 小川 未明  
編集 劇団のの  
発行 劇団のの  
[http://gekidannono.com/  
radio@gekidannono.com](http://gekidannono.com/radio@gekidannono.com)

※本文は、青空文庫様掲載の原文を加工したものです。  
底本 『定本小川未明童話全集 3』第7刷  
出版社 講談社  
初版 1977年1月10日  
図書カード URL  
<https://www.aozora.gr.jp/cards/001475/card51091.html>

